



## 秋こそ稲わらの腐熟促進！土づくりのチャンス！

稔りの秋、肥料高騰もあり、土づくりの重要性はこれまで以上に高まっています。積極的に秋耕を行い、稲わらの分解促進、有効活用を進めましょう！

### ◎ 稲わらの施用効果

稲わらを施用すると、土壌中の養分量が高まります(表1)。また、土壌がやわらかくなり、孔隙率が高まるため、水分や空気を保持する機能が増え、気象変動に対する抵抗力も高まります(表2)。

表1 稲わらで土壌に還元される養分量 (kg/10a) 表2 稲わら施用による土壌物理性の変化

窒素	リン酸	カリ	石灰	苦土	鉄	ケイ酸
4	2	14	3	2	1	60

※稲わら由来のケイ酸の利用率は約10~20%

	孔隙率 (%)	貫入抵抗値(10cm)
稲わら施用	72	8~9
無施用	65	13~14

### ◎ 秋浅耕で稲わらの腐熟促進

稲わらは気温が10℃以下となると分解が進まなくなるため、**稲刈り後できるだけ早い時期に『5cm程度の浅耕』を行い、腐熟促進を図りましょう。**その際、腐熟促進剤や石灰窒素等を散布すると一層秋耕の効果が高まります。

※つや姫の場合、石灰窒素の投入量は10kg/10aを上限とし、必ず基肥の減肥を行いましょう。  
(地力高、全量基肥栽培の場合、石灰窒素施用は控える)

### ～稲わらの分解が遅れると～

春の耕起までに稲わらの分解が進んでいないと、耕うん後土壌と混和された稲わらは急激に分解が始まり、基肥窒素は稲わらの分解に使われ、移植後の稲が吸収する肥料分が少なくなってしまいます。また、稲わらの分解とともに還元(ワキ)が進み、根が伸びにくくなり、稲の初期生育が抑制されます。

### ◎ 全量基肥の適正使用・過剰施肥防止について

全量基肥肥料は種類も様々なため、使用する肥料の溶出パターンを把握し、「基肥量は足りているか?」、「追肥は適量か?」等を確認することが大切です。

**窒素量は基準より控えめとし、地力の高い圃場では使用しないなど、十分な検討を。**リン酸、カリが足りない場合には、土づくり肥料、カリ追肥で補いましょう。

### ～施肥量を増やすと～

粗数過剰に伴う品質低下(登熟不良)や、登熟後半の窒素吸収量の増加に伴う食味低下(玄米粗タンパク含有率の高まり)の原因となります。

## 見直そう！農業機械作業の安全対策！

作業前には、機械の点検、危険箇所のチェック等を行い、農作業事故をなくしましょう。